令和5年度学校関係者評価報告書

近畿大学附属高等学校・中学校

【1】近畿大学への進学について

大学キャンパスに隣接する近畿大学の附属校としての特性を最大限に活用し、高校課程では、大学各学部による各種講座および実習が実施され、自らのキャリアデザイン構築に結びつけることができる指導を展開し、中学校課程では大学各施設を利活用した体験型学習が実施されたことが報告された。医療関係の施設では、新型コロナウイルス感染症の影響が残り、医学部見学は実施できたが、看護体験実習、薬学部での実習などは中止となった。その他の体験学習・講座などはコロナ禍前に戻りつつあることが報告された。今後も継続して中学校課程では主体的・対話的で深い学びを実現し、高校課程では十分な知識をもち、それを活用した判断力・表現力を発揮できる主体性を育む附属校ならではの指導を展開する必要があるとし、柔軟な思考と学び方を身につけた社会に貢献できる自立した学習者の育成と近畿大学への進学が肝要であることについて理解を得た。

【2】生徒育成の徹底について

登校時間の厳守と遅刻管理システムによる保護者との情報共有を実施し、学校と家庭双方から遅刻生徒への支援の働きかけが実現したこと。登下校時に周囲への配慮が足りない生徒に対して、年間計画に基づき指導していること。生徒会が全校生徒対象に様々なアンケートを行い、集計を分析することで、より良い学校環境の拡充に向けて話し合うことができたことが報告された。本校に対するお褒めの言葉について、集会などで生徒を褒め称えて自己肯定感へと繋げ、苦情などについては、学年集会、HR活動、サイバーキャンパスを通じて、生徒への問題の投げかけ・注意・支援行うことにより、一人ひとりが大規模校に通う生徒としての自覚を持つきっかけとなった。その結果、全生徒が本校に対するクレームを自分事として受け止め、自己の行動の変革に繋がったことが報告された。

【3】学習指導の徹底について

iPadの利活用により、中学校課程では「自ら考え・自ら導き出す」授業を展開、ロイロノート・スクールを利活用することにより、生徒が主体的に学べる学習機会が定着している。高校課程ではロイロノート・スクールなど各種アプリを利活用する授業が定着する傾向が続いたことが報告された。本校ではICT教育環境を整備して10年以上になるが、生徒一人ひとりが自らの将来の姿を考え、その実現のために必要な学びが能動的にできる教育の場を提供することについて理解を得た。

授業満足度について、授業アンケートの結果が、中学校86%、高校90.4%で、生徒の満足度80%以上という目標が達成されたことについて説明され理解を得た。

社会貢献マインドを持ったグローバル人材を育成するため、IB教育室中心に、IB(国際バカロレア)のディプロマプログラムの導入にむけてのプレ期間として最終的な準備を行ったことが報告され理解を得た。

【4】進路指導の徹底について

令和5年度は前年度に比べて在籍者数が少なかったため、国公立大学の合格者数は減っているが、合格率は下がっていないことが報告され理解を得た。また、卒業生の人数も明記するなど工夫するように助言があった。特進クラスの群・学年・教科担当者の連携と指導力を強化し、研修会や説明会を通じて生徒の目標達成を支援していること。教員が国公立大学進学情報、在籍生徒の成績分析結果および志望状況に関する情報を共有化した上で、の細かな進路指導を実施し成果をあげたこと。更に生徒自身が将来像を描き進学目標を定められるよう、講演会や進学イベントを実施したことを報告し理解を得た。新たな試みとして、教員対象に予備校の教員を招いて研修会を実施したことが報告された。

【5】健全な経営状況の維持について

光熱水費・空調更新・動力盤更新・剣道場床張替・理科実験室実験台等取替・出張旅費等の支出が増えていることを報告し、生徒募集人員を充足していることが報告され理解を得た。

以上